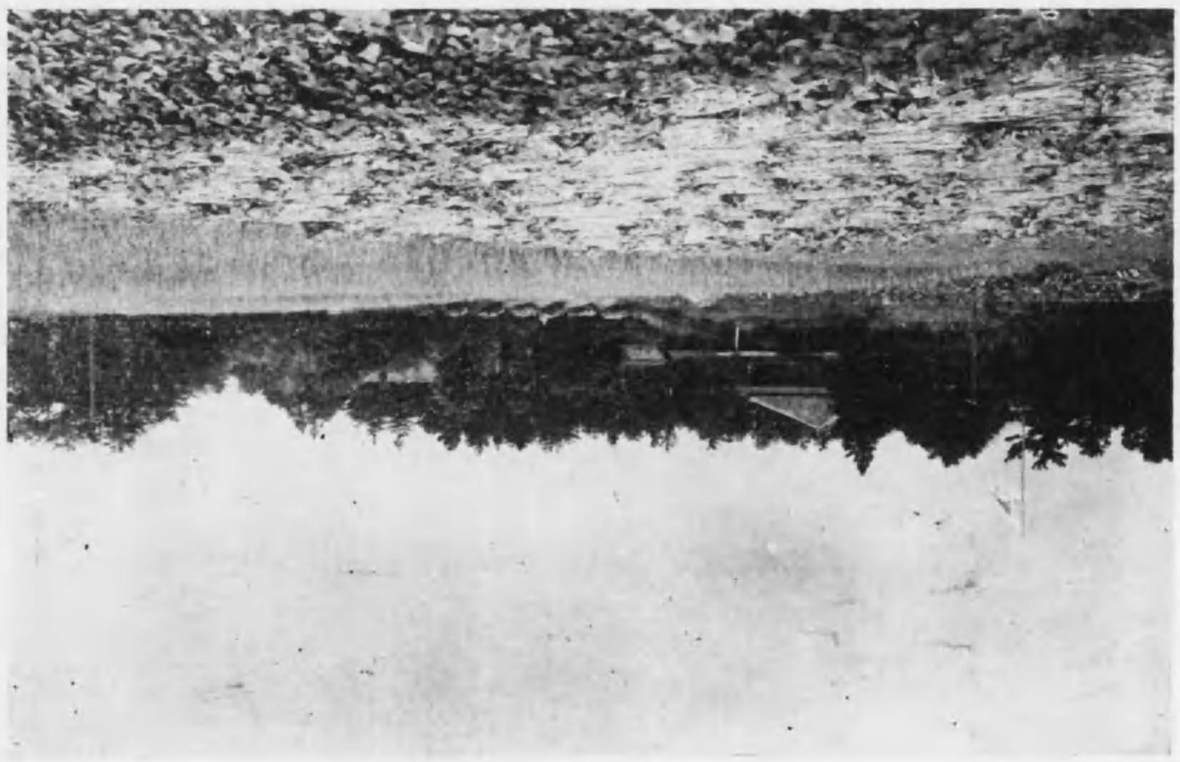
特249
417

昭德塾道場要覽

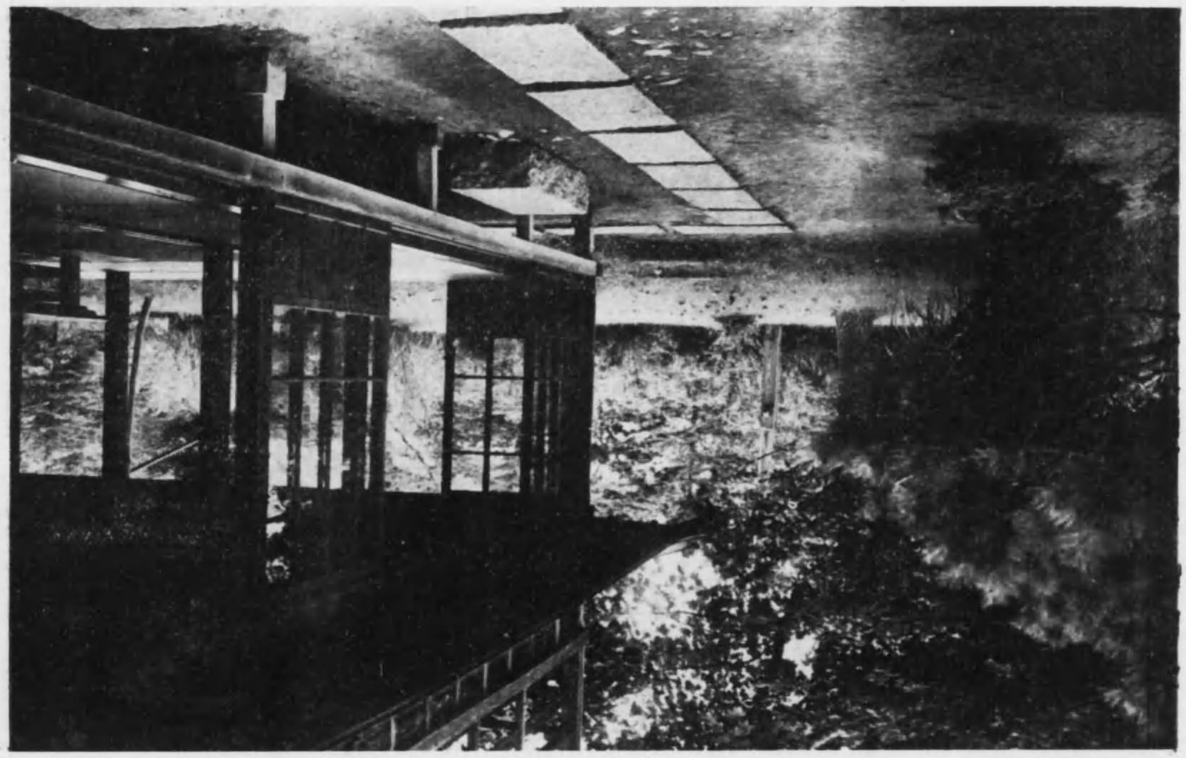
35
4

始

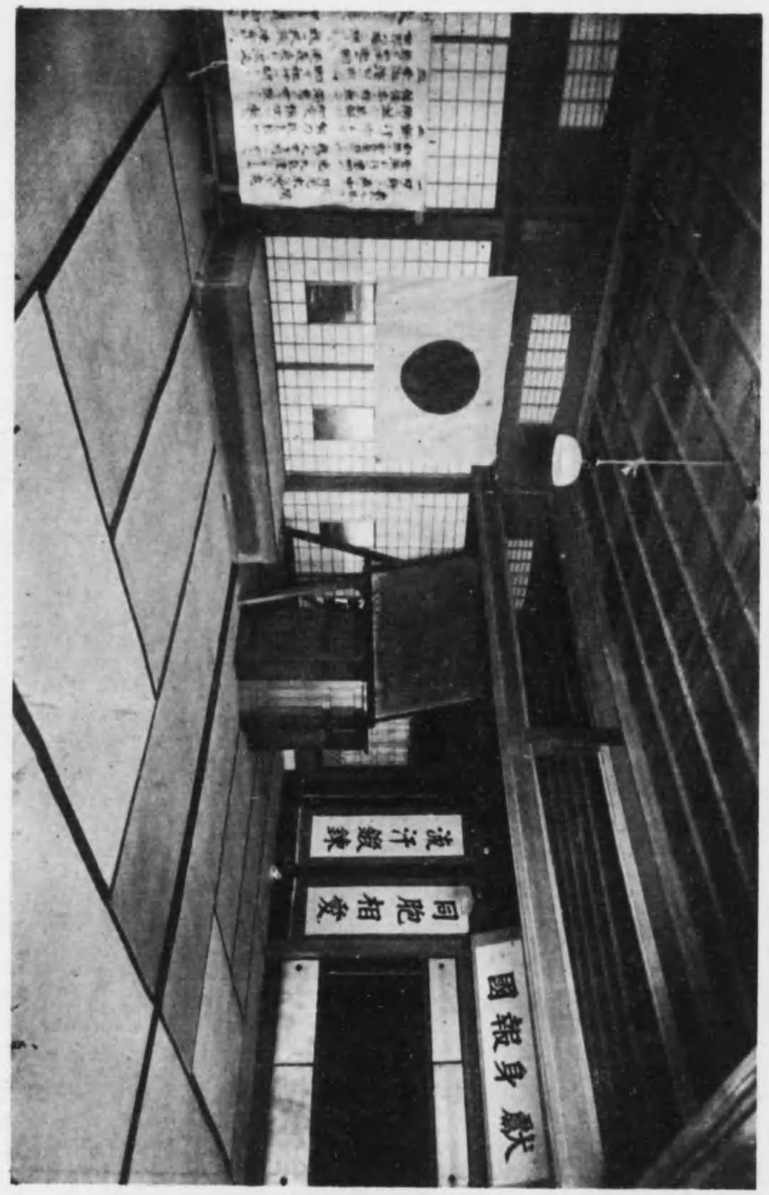


昔全蜀道勢德昭

園庭　昭和二年　道場



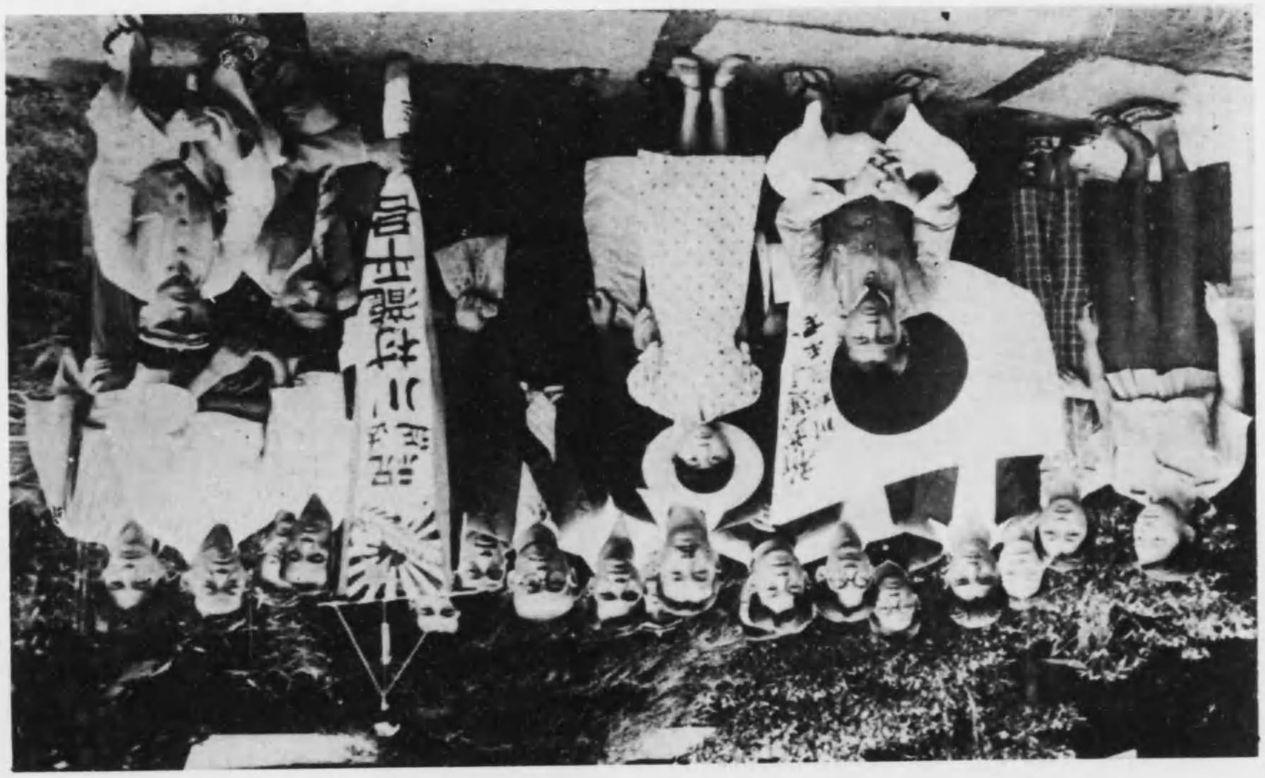
關文　昭和二年　道場



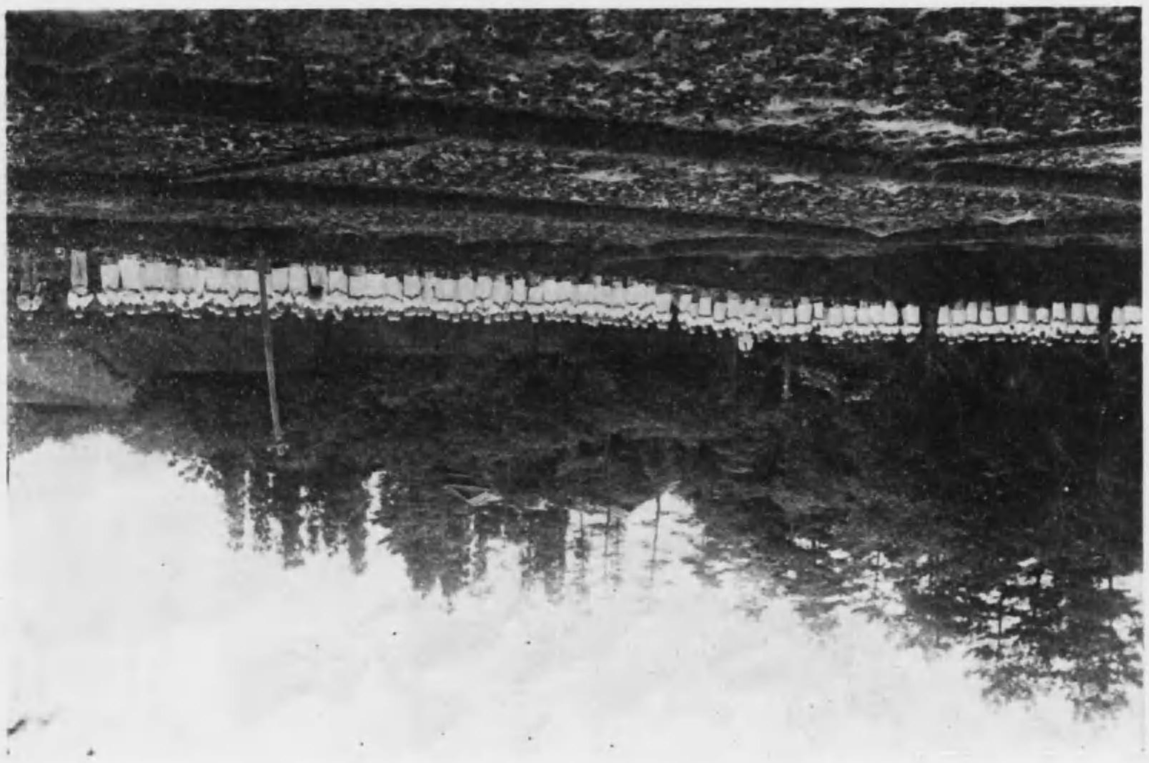
昭德塾道場内部

昭德塾山莊（立てるは藤代主事）

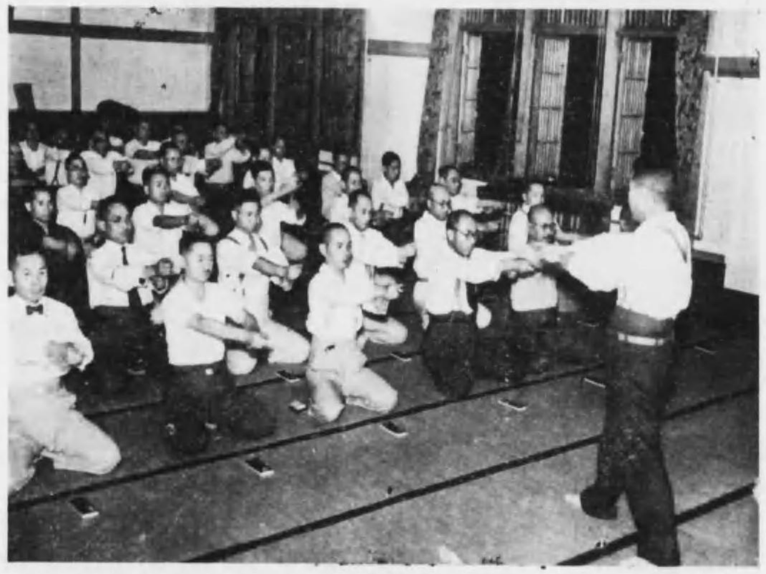
征出生塾



（都營團地青年女塾）唱合歌塾



食前感謝（東京市立二中生徒）



打込の氣合（全國保護觀察所保護司講習會）

昭德塾道場要覽

目次

（昭和十四年度）

一、設立の趣旨……一
二、所在……二
三、沿革……二
四、設備……二
五、事業……三
六、昭德塾の「行」……三
（イ）「行」について……四
（ロ）「行」の修業……七
（ハ）「行」の形式と心構へ……九
七、塾の日課……一〇
八、講習會の開催……一七
九、昭德塾道場規約……二二
一〇、昭德塾道場役職員……二三

昭德塾道場要覽

（昭和十四年度）

一、設立の趣旨

吾等が天地父母祖先より享けて現に保有する生命には偉大なる力の潜在するありて、一度び之れを覺醒する時は、懦夫も勇者となり凡愚も聖賢に飛躍し、健康、幸福求めて得られざるなく、何人もその本然に歸り明魂を現し惟神の大道に歸一し奉ることを得べく、之れを覺醒する所以の道は、敬神、崇祖を第一義として旦暮日夜に行ふ行に如くはなしと信ずるが故に、「行」を主としたる修養の道場を設け、廣く日本精神の宣揚に努め、以て世界遍照の天業を輔翼し奉り、皇恩の萬一に報ぜんとするものである。

二、所　在

千葉縣東葛飾郡小金町久保平賀三百三十六番地。古への小金ケ原丘陵起伏の勝地。汽車は常磐線北小金驛下車徒歩十分。(上野驛より三十分)。道路は東京より水戸に至る水戸街道に沿ふ。

三、設　備

敷地　三千八百坪(內農場四段歩、宅地山林二千六百坪)舊東治館と稱する溫泉宿の跡。

建物七棟　二百五十坪　外に大弓場、兎舍、物置。

四、沿　革

昭和九年一月時の司法次官皆川治廣は左傾の思想上下に波及して施すに術なく徒らに嚴罰のみを以て之を克服せんとするも其の轉迷悔悟は容易に望み難き世情に鑑み寧ろ彼等を一定の場所に收容して「行」的訓練を施し以て之を救濟するに如かずとなし大孝塾道場を設けて自ら塾長となり、廣く一般人士と共に修養鍛錬せしめ爾來六年間百二十餘名の盲信的高度左翼思想者を完全轉向せしめて忠良なる日本臣民に育成し再び社會に之を送りて豫期以上の成果を收めた。其の間昭和十一年十二月思想犯保護觀察法施行令第二條に依り司法大臣より思想保護團體としての指定を受く。昭和十四年五月皆川塾長は塾の一切を擧げて財團法人昭德會に寄贈したるを以て同會は同年七月一日より本塾を昭德塾と改名し從前の主義方針を踏襲し塾生職員を引繼ぎ之が經營を開始したのである。

五、事　業

一、塾生の收容

定員　男子　二十五名

入塾資格　年齢學業經歷等の制限なし

期間　定めず

二、講習會の開催

一般の修養講習會開催

三、卒業生の指導

四、機關誌の發行

五、その他目的達成に必要なる事業

六、昭德塾の「行」

(イ)「行」について

昭德塾は、口耳の學を主とせず意識以下へ鍛錬を加へようとしてゐる。

普通の學問道德は丁度氷山の水面に現はれた部分のやうなもので意識以上の問題であるが、塾では、水面以下に眼には見えないが氷山の大きな部分が潛在してゐるやうに、意識以下の力といふか、潛在意識といふか、或は、肚とでもいふか、一寸言ひ現はし難いところを覺醒せしめようとする「行」をやつてゐる。

老子の開卷第一章に、

道可レ道非二常道一、名可レ名非二常名一、無名天地之始、有名萬物之母、

とあり。此の「道の道とすべきは常道に非ず」、といふ一句は老子八十一章の概括であると思ふが、仁であるとか義であるとか指定說着すれば既に道の眞面目を失ふ。曰く言ひ難きその根本が覺醒せられて、本當の道に叶へば、萬事自在無碍、往くとして可ならざるはなくなる。

西洋でもエマーソンは

「人間は自分で思つてゐるよりもよつぽど賢いものだ」

位までは云つてゐるが、健康幸福求めて得られざるなしといふ偉大な力が潛在してゐる事迄には氣がつかないらしい。併し「向上一路千聖不レ傳」といふ句の通り、轉迷悔悟向上の一路は、聖人が千人かゝつても傳へやうがない。敎へて敎へ得べからず悟るより外に方法はない。馬を水邊へ導く事は馬丁一人あれば澤山であるが、その馬に水を飲ますといふ事は、馬が自分で飲まない以上、智者が千人集つてもどうする事も出來ない。畢竟各自に偉大な力は持つてゐるのだが、それが眠つてゐるとまちがつた方向へ走つたり、一生醉生夢死に終る。ところがそれが何かの刺戟で、一觸卽發覺醒せられると向上發展驚くばかりになるのである。人を作るといふ事は、皆が內に持つてゐる力を如何にして覺醒せしむべきかといふ事である。

凡そ、生きとし生けるものは皆活動するが、その活動の起るには二つの經路がある。

その一は、直感直動（心理學上の直觀或は衝動とは別）卽ち或る感じが來ると直ちに活動に移つた場合で、直感と活動の間に間隙がない。

その二は直感と活動の間に間隙があつて、その間に考へてみたり、理論づけてみたりした後、初めて活動に移る卽ち、意識を生じて後活動に移る場合と、第一のやうに意識を生ぜないうちに活動に移る、無意識に活動に移る場合との二つがある。

第一の意識にまで上らないで活動するのは意識以下の力に支配されて活動したもので、之れは潛在意識といふか、血の中に在る潛勢力で意識下の力である。

第一の場合は全部善い活動となつて、第二の場合は全部惡いといふわけではないが、意識下の力

が強く正しく覺醒されてゐれば、自由無碍、心の欲するところに從つて矩を超えないどころではなく、悉く最善、最高の活動とならざるはない。君子はその本を務む、本立つて道生ずで、最も大切な事は意識下へ鍛錬を加へるといふ事である。それは何に依つて可能か、即ち吾人の所謂「行」に如くものはないと信ずるものである。

古來日本人は、直感直動、理論抜きで、實行して來てゐる。泰西の文明は、意識上の問題のみに囚れ殊に「物」のみの議論であるが「物」は生命の殘滓である。生命あるものは死して「物」となるが、如何なる「物」よりも生命の一つをさへ創造し能はぬ。生命が先きか物が先きか。數千年來連綿として、生成發展し來れる大生命の流れの一環として現に有する吾等の生命は數千萬代の「孫」であり、同時に、又數千萬代、無窮の「祖」でもある。此の祖孫一體觀こそ我が惟神の大道の根本義であつて、塾修行の根本信念である。斯くてその本然を發揮するために、敬神崇祖の「行」を修し「神祖」に歸一し奉る。之れ昭德塾本來の面目である。横の關係のみを論じて縱の祖孫觀を考へざる西洋の倫理哲學は、何が最高の道德であるかは示すが、然らば如何にして之れに到達し得るかは示した者のあるを聞かない。机上の空論を排して祖孫一體觀に立ち禊祓して神前に行じ來れる吾等の祖先は實に偉大にして惠まれたる世界唯一の民族である。祖孫一體觀より大和心が生ずる。大い

に和するためには、愛が必要である。愛の極致は犧牲である。命を輕く視義を重んずる日本精神は之れから生れる。

(ロ)「行」の修行

「行」の修業は泣く子に乳といふやうに簡單にはいかぬ。不斷の努力繼續に依らなければならない。草取りをして悟るものもあれば、兎を飼つて感じるものもあるが、事の成るのは成るの時に非ずして必ず因つて來る所がある。その根底は數千年來親讓りの血の力であるが、一觸すれば即發する準備が出來てゐなければ一生眠つてしまふ。その準備は日々の「行」を最とする。只讀む聞くだけでは效果は少い。絶對にないとは言はぬが、そういふ理智的な問題は、意識下の力に影響を及ぼす事が少く理解したゞけで、實行の伴はない論語讀みの論語知らずになり勝ちである。日本の軍隊の強いのはその精神にある事勿論であるが猛烈な「行」の力、即ち繰返し繰返す實際的訓練にある。

併し意識上の鍛錬を決して等閑に付するものではない。廣く古今東西の神學哲學に對しては、視角を新にして考究はするが、水戸の光圀の瑞龍山の碑文に「神儒を尊んで神儒を駁し、佛老を崇めて佛老を排す……歡べども歡びを歡びとせず、憂へども憂ひを憂ひとせず、月の夕花の朝云々」とあるやうに其の攝つて以て養ひとなるものは攝るが、一つの思想なり、哲學なりを捉へる事を窮極

の目的とはしない。況して其れを觀念的に捉へようなどとは考へない。「行」の體驗を通してこそ始めて各自の内に潜める偉大なるものを發見覺醒する事が出來る。すべての根本は外にはなく、自分の内にある。

ルソーは、エミールの中で、子供の寢床はどんなのが良いかといふところで「或人は絹の床が良いといひ、又或人は毛の床が良いともいふが、兎に角安眠し得る床が一番良い。自分の所謂安眠の床とは、晝の間にエミールと二人で畑を掘りつゝある間に作る」といふてゐるが、塾では安眠の床は勿論、健康も、幸福も上等の料理も「行」じてゐる間に作る。

現代人の病ひは、僅かばかりの知識に災ひされて、素直に「行」ずる事の出來ない者が多い。老子に、「下士は道を聞いて大いに之れを笑ふ。笑はされば道とするに足らざるなり」とある。

單に書物を丸呑みにすれば足りる底の意識上の學問は反省を缺き自惚れを生ずる。書いたものは眞の知識ではない。書物は飜譯物に過ぎない。原書は自然で、天地は書かざる經文である。三段論的の知識で事理を解せんとしても解るものではない。心眼を以て觀、心耳を以て天地の經文を聞き一段論的に觀なければ駄目だ。タゴールも、

「字や書の助けでその意味を探らうとするものは、只無意味に家には着くが、室の外側に立止つた儘であつて、廊下へ這入る入口が分らない樣なものである。實行に依らないで文字で解釋しようとする時限りなき論爭が起るも之れと同じ理由である。網をすく事には忙しくて漁る事を忘れてゐる人々である」と。

數千年前プラトーも「吾々が他人から得る扶翼といふものは、吾々自身の天性よりせる發見に比して機械的で實につまらぬものである」といふてゐる。

學、苟も本を知れば六經は皆我が註釋である。

(八)「行」の形式と心構へ

塾に於ける「行」は主として禊祓に據るものであるが、古への形式そのまゝは相當の困難を伴ふ。故にそれを現代化して平易にし、その上現代に最も缺けたる大太神樂の精神を加味してゐる。岩戸開きの行事こそ、理想の明き世界建設の秘訣である「天晴」「あな面白」「あな手伸し」の光明、明朗の「行」である。日本精神は古來明き心とか、直き心卽ち明朗で素直な心といはれてゐたものであるが、それが次第に曇り遂には驕慢な心を生ずるものも出て、心扉を開いて靈光を仰ぐ事が出來なくなり、權謀術數を弄し反目疎隔し物質文明の華麗は人目を眩惑せしむるものあるも、針の筵に在るが如く、心からの笑ひを忘れてゐる。素直な朗かな本來の心持ちで「行」ずるのである。

七、塾の日課

一、誓願の太鼓、午前五時（冬は六時）

小金ヶ原の黎明、清澄な空氣を振はせて鑾々と響く誓願の太鼓を合圖に、各自床上に端坐先づ天地神明父母祖先に感謝の禮拜を捧げる。

斯くして一日の塾生活は始まる。

二、自室整理、洗面

三、體　操

駈走太鼓を先頭に「ヨイサ〳〵」の掛聲勇ましく駈走。

雨天の時は、唱歌、律動遊戯。

日本國民體操

1 敬　禮
2 擧踵半屈膝
3 頭の後屈、左右轉
4 上膊の上下伸
5 上體後屈
6 體左右屈
7 左右の惡魔拂ひ
8 屈膝擧股
9 太平洋乘切運動
10 意氣衝天
11 呼吸運動
胸式、腹式、胸腹式
12 敬　禮

四、氣　合

1 胴抜き
2 兜割り
3 打込み

五、美化運動

自室以外の室の内外を美化す。

六、國旗掲揚

心身を清め、服裝を整へて君が代奉唱裡に掲揚。

七、朝の行

講堂に集合、整列端坐

1 敬禮

2 振動凝念

兩手を組み上下に振動（振魂）

塾の目標たる

流汗鍛錬　同胞相愛

獻身報國　八紘一宇

の四句を唱ふ。

3 靜坐

4 神宮遙拜

二拜二拍手一拜

5 祈の詞奏上

一同低頭

6 天皇陛下に對し奉り最敬禮

7 父母祖先に敬禮

8 正式に朝の挨拶

9 朗誦

道の光　心の力　孝經等。

10 明治天皇御製奉詠　二首

11 靜坐默想

12 誓願の朗誦

人よ醒めよ醒めて愛に歸れ

愛なき人生は暗黑なり

共に祈りつゝ總べての人と親しめ

吾が住む郷に一人の爭ふ者もなきまでに
人よ起てよ起ちて汗に歸れ
汗なき社會は暗黒なり
共に祈りつゝ總べての人と働け
吾が住む郷に一人の忘る者もなきまでに

八、朝

13 敬禮

食

各自食器を捧げて着席

敬禮

食事の用意（食器に盛る）

食前の感謝

先づ指導者指揮

合掌瞑目

感謝と敬虔

一切が是れ犧牲の賞

食物一切に感謝

天地の大恩感謝

祖先の功勞感謝

衆生の大恩感謝

健康なる現實感謝

食前感謝の辭

一　同　にて

美はしうしてうまき朝食今饗く

希くば吾れ人諸共に心身壯健にして

同じく正道に進まんことを食を饗けては

正に眞理を心の食とし、嚙み碎きて

諸德の味を知らんことを祈る

戴きます。

食事終れば食器は各自にて整理
食後感謝の辭
合掌　瞑目
飯食終つて身力滿ちたり
勇氣前に倍して事を爲すに堪えん
いでや奮つて己が業にぞいそしまん
いでや奮つて己が道にぞいそしまん
御馳走さま。

九、午前中　自學、自習を本體とするも
講話、向上會、座談會、個人指導等をなす事あり。
一〇、晝　食　午前十一時半
作法　（前と同じ）
一一、午後
流汗作業　或は運動競技

（田畑山林庭園の作業）
一二、おやつ　午後二時半
一同談話室に集まり茶菓或は農場よりの收穫物
一三、入浴　午後五時
一四、夕食　午後六時
一五、夜の「行」　午後七時
朝の「行」と略同じ
一六、就寢
消燈の時間を定めず　自由

八、講習會の開催

塾の意義、精神を體得せん事を希望し團體を組織して受講申出でありたる時は、塾の差支なき限り指導す。
受講者は大、中、小學校教師、學生、生徒、役所、會社、青年團等各層に亘り二日より五日位塾

に宿泊講習す。

昭和九月八月三日より五日間、全國指導者講習會八十二名を第一回として

千葉縣首席訓導	八十五名
千葉縣實業學校教諭	二十三名
中島飛行機製作所	六十七名
三菱製紙會社	三十七名
東京市小學校中等學校教師	五十九名
市川市教育會	六十五名
千葉縣小金町青年團	六十八名
正則中學校職員生徒	八十五名
東京モスリン會社	百六十五名
全國社會教育指導者	百十二名
千葉縣東葛飾郡小學校長	三十八名
同印旛郡小學校校長及首席訓導	七十二名
同印旛郡實業學校職員生徒	四百三十名
東京市小學校長	百十名

其の他東京を中心として全國より受講者約七千名に及ぶ。

卒業生指導

東京を中心に毎月一回希望ありし所に於て會合夕食を共にし、塾の「行」を修し座談す。

第一回	昭和十一年九月十日	京橋區泰明小學校
第二回	昭和十二年四月三十日	東京學士會館
第三回	同 六月十六日	芝區櫻田小學校
第四回	同 七月十三日	東京市立第二中學校
第五回	同 九月十四日	芝區正則中學校
第六回	同 十月十二日	中野區東亞商業學校
第七回	同 十一月九日	澁谷區廣尾小學校
第八回	同 十二月八日	神田區小川小學校
第九回	昭和十三年一月二十九日	芝區聖坂小學校

第十回	同	二月十四日	神田區淡路小學校
第十一回	同	三月二十六日	下谷區下谷小學校
第十二回	同	四月二十五日	荒川區眞土小學校
第十三回	同	五月十六日	本郷區本郷小學校
第十四回	同	六月八日	神田區一橋小學校
第十五回	同	七月四日	杉並區桃井第三小學校
第十六回	同	九月二十七日	京橋區泰明小學校
第十七回	同	十月十九日	芝區正則中學校
第十八回	同	十一月二十九日	東京市立第二中學校
第十九回	昭和十四年一月二十六日		中野區府立家政女學校
第二十回	同	二月二十五日	神田區佐久間小學校
第二十一回	同	三月二十七日	東京市立第二中學校
第二十二回	同	四月二十九日	埼玉縣野火止二中體育團
第二十三回	同	六月二十六日	蒲田區敬愛女子商業學校
第二十四回	同	七月四日	京橋區泰明小學校
第二十五回	同	九月五日	京橋區泰明小學校

九、昭德塾道場規約

第一條　本道場ハ昭德塾ト稱ス

第二條　本道場ハ千葉縣東葛飾郡小金町久保平賀三百三十六番地ニ置ク

第三條　本道場ハ思想事件關係者ニ對スル思想ノ輔導其ノ他思想犯保護ニ關スル事業ヲ爲スヲ以テ其ノ目的トス

第四條　本道場ハ前條ノ目的ヲ達スル爲左ノ事業ヲ行フ

一　思想事件關係者ニ對シ行的訓練ニ依ル思想ノ輔導

二　思想事件關係者ニ對シ就職、復職、復學ノ斡旋及職業指導並身上相談其ノ他ノ方法ニ依ル保護

三　講習會、座談會及講演會ノ開催並出版及機關紙ノ刊行

四　其ノ他目的達成ニ必要ナル事項

第五條　本道場ニ左ノ役職員ヲ置ク

一　塾　長　一人
一　主　事　一人
一　事務囑託　若干人

第六條　塾長ハ財團法人昭德會長ノ職ニ在ル者ヲ推薦シテ之ニ充テ塾務一切ヲ總理ス
主事ハ適當ナル者ノ中ヨリ塾長之ヲ任命シ塾ノ常務ヲ掌ル
事務囑託ハ適當ナル者ノ中ヨリ塾長之ヲ委囑シ主事ヲ補佐ス

第七條　本塾ノ經營ニ要スル費用ハ財團法人昭德會之ヲ助成ス

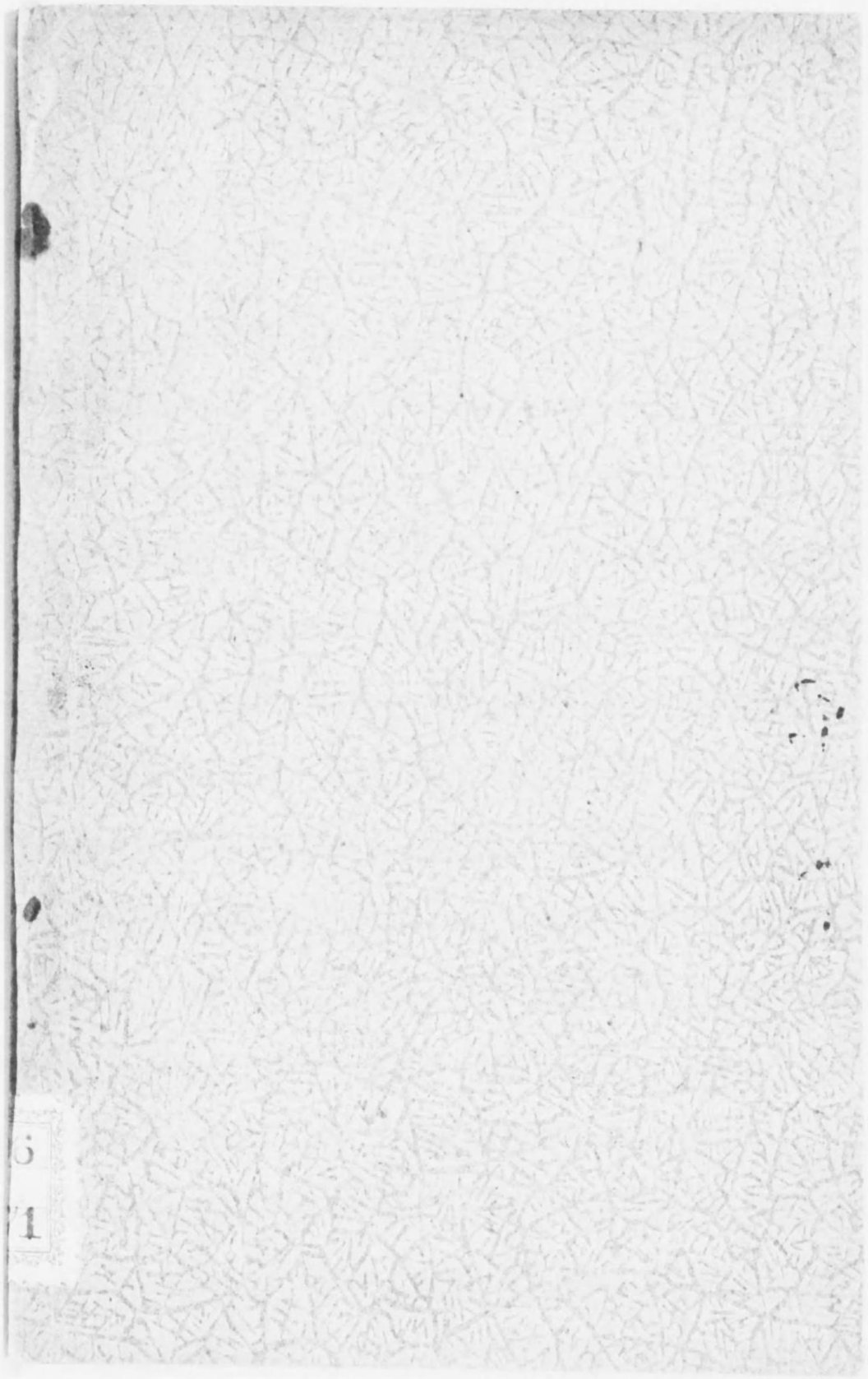
一〇、昭德塾道場役職員

塾長	昭德會長 司法次官	岩村通世
但シ當分ノ間 塾長事務取扱	昭德會委員 司法事務官	岡本吾市
主事		藤代新七
事務囑託		服部良平
同		藤代ふき子
同		速水正夫

396
471

昭和十四年十一月十日印刷
昭和十四年十一月十五日發行
（非賣品）

千葉縣東葛飾郡小金町久保平賀三三六番地
編輯兼發行人　藤代新七
東京市神田區錦町一ノ一四
印刷人　横尾留治
印刷所　松華堂印刷所

千葉縣東葛飾郡小金町久保平賀三三六番地
發行所　昭德塾道場
電話小金一三番

終